

聞き取り調査

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 高村 國夫

一、出生から終戦まで

私は、風光明媚な富士山の麓、山中湖畔に生まれ、山中高等小学校卒業後、満州国奉天飛行機製作所、製作工養成学校に入所し、軍用機製作工程を卒業し、航空隊技官（軍属）として陸軍航空隊ハルピン第七二五部隊（航空隊審査部ハルピン支部）に昭和十六（一九四一）年四月一日に入隊。ハルピン郊外の飛行場において飛行機の整備や飛行機の技術教育に勤務してまいりました。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が国境を突破して満州国に南下したとの情報を聞き、八月十五日に大本営から陛下の終戦の詔勅が発布されたことも上司から聞きました。が、まさか日本が敗戦するとは信ずることができず、「デマだ」と部隊は飛行場の周辺警備を厳重にしていたところ、八月二十三日早朝、ソ連戦車に包囲され、そのまま戦わずして武装解除されてしまいました。

私どもは九月一日の早朝、「日本へ帰るぞ（東京ダモイ）」というソ連将校の命令があり、ハルピン駅から有蓋貨車に押し込まれ、牡丹江から図們まで南下しました。「日本ダモイ」を信じて喜んでいたら、図們駅で下車。「ここからウラジオ港へ行くのだ」と、徒歩でソ満国境の原野を

一週間も行軍させられました。九月半ば、シベリア鉄道沿いの田舎駅からまた有蓋家畜輸送車に乗せられ、今度は南下でなく大きなアムール河に沿って北上から北上、また一週間も運ばれ、着いた大きな街はコムソモリスクというシベリア第一の重工業都市でした。

二、コムソモリスク収容所で労働に従事

コムソモリスクはハバロフスクから約六百キロメートル、アムール河を通じてウラジオストック、ハバロフスクと船舶の航行も可能であり、シベリアにおけるスターリンの五カ年計画振興軍事基地として要塞化され、飛行場もあり、飛行機製作所、戦車製作所、鉄工場等の軍事工場や、レンガ工場、木材工場等、産業都市としても活力ある都市のようでした。

私どもの収容された場所はアムール河から約三キロメートル離れた小高い山村の第十八収容所と呼ばれ、元ドイツ人捕虜が入っていたという半地

下式のレンガ造りの小学校のような大きな宿舎でした。ペーチカ式で保温もよく電灯もあり、比較的に生活環境はよかったです。しかし、十月初旬だというのに既に雪は積もり、夜は零下三〇度という寒さの中で、衣服は夏服のまま冬衣の支給もなく、食糧も満州から調達してきたトウキビ、アワ、ヒエ、大豆の類で米はなく、黒パンも定量は支給されず、毎日空腹、空腹で、この冬にかけて栄養失調の病人が続出して多くの戦友が死亡しました。

私は幸い飛行機製作技術者だったので、同技師四人一組となってコムソモリスク飛行機製作所に行き、ハバロフスク等から捕獲してきた日本軍の飛行機の整備、修理、点検等の仕事をするようになりました。ソ連軍では日本人の技術者をエンジニアと呼んで、その対応もよく、仕事にノルマもなく、私どもに待遇もよかったです。この種の工場に通っている間は割合楽な労働でしたが、たまに他の戦友の代わりに建設現場や道路工事、コル

ホーズ農場作業に駆り出された日は、重いノルマのため五〇パーセントくらいが精いっぱいでした。嬉しかったのは、他の作業でコルホーズの農園手伝いに出たとき、私と同郷（隣村）で忍野村忍草の渡辺喜三兄と出会い、約一時間と同じ農園作業に従事したことがあり、この奇遇は一生忘れ得ない思い出となっています。

三、飛行機での脱走果たせず中止

昭和二十二年四月初旬、春の訪れとともに私どもは捕虜生活にもなれ、技術者という特典もあってソ連兵の監視もそれほど厳しくなかったので、東京出身の先輩技官から「我々は一生技術者としてソ連で酷使されるだけだ、皆で飛行機で脱走しよう」と提案があり、私たちはその気になって皆で計画を立て、まず「コムソの飛行場からカラフトの飛行場へ」と経路を決め、脱走機の整備も終え燃料給油の段階まで準備を了したが、どうしても給油の方便が立たずやむなく中止したのでし

た。

あのとき、無謀な脱走でもしたのなら、どこかで捕まって銃殺されていたであろうと思うとゾッとする思いです。

同年八月初旬頃、私ども飛行場勤務の戦友達四人と、同収容所からコムソモリスク中央病院に入院していた病弱者約三百五十人が「東京ダモイ」ということで収容所長の命令が出て、コムソモリスク駅から貨車でナホトカまで夜間のみ輸送され、ナホトカの収容所に入れられました。この収容所では、「日本上陸」の準備として「日本革命のための民主教育をする」と言って二週間くらい、革命理論や「赤旗の歌」など教え込まれましたが、私どもは黙って真剣に勉強しました。私は、日本国家を革命するか、このまま再建するかは、まず生きて日本に帰って考えることだと考えていました。

四、帰国後の生活と子孫への遺言

昭和二十二年八月十三日、私も二千人の同志は、日の丸の旗をなびかせた日本の輸送船「遠州丸」に乗船を許され、「これで生きて故郷へ帰れるぞ」と感激しながら飛び乗り、八月十五日、夢に見た舞鶴港に上陸、翌十六日、富士山の麓、山中湖畔の父母の待つ我が家にたどり着くことができました。

その後、私は父の事業を継いで旭ヶ丘の別荘地に家建て、観光客を相手にホテル事業を経営し国家再建のため働いて、妻良子とともに元気な二男を育て幸福な生活をしています。この労苦調査を申し上げるに際して、子孫や国民の皆さんにぜひお願いしておきたいことを次に申し上げます。

1 戦争は絶対にしないで下さい。

2 家庭の者はみんな仲よくして、よく働き、幸福な家庭生活をして下さい。

以上をお願いして、私のシベリア抑留の労苦調

査報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 渡辺喜明

一、出生から終戦まで

私は、霊峰富士山の麓、富士吉田市新倉に生まれましたが、故あって忍野村内野で育ち、忍野高等小学校卒業後、昭和十二（一九三七）年十月、山中郵便局員として勤務していましたが、戦时下、現役兵として東京代々木第七部隊（輜重兵連隊）に召集され、昭和十六年七月十七日入隊、直ちに満州国浜江省ハルピン第四五一部隊に転入され、大連経由でハルピン駐屯隊に入隊しました。

私は、農家育ちで農耕馬を取り扱っていて馬の飼育や調教が上手だったので、中隊一の馬匹訓練士として下士官（班長）に任官しましたが、部隊は昭和十九年九月、黒河省孫吳に移駐し、私も